

令和5年産水稻の作柄概況

令和5年12月4日
神奈川県農業技術センター

1 育苗期

育苗期間中の気温は概ね平年並みであったが変動が大きかったため、苗は全体的に徒長傾向となった。一部で立枯症状が見られたが概ね順調であった。

2 生育初期（移植期～分けつ期前半）

移植時期は概ね平年並みであった。

5月下旬から6月中旬までは日照不足となったが、気温は平年並み～やや高く推移したため、苗の活着は概ね良好であった。

6月上旬に記録的な大雨があったが、生育に大きな影響はなかった。6月中旬以降は平年より気温は高く、日照時間が長く推移したことから、平年に比べ草丈は長く、分けつは良好で茎数が多くなり、初期生育は旺盛であった。

3 生育中期（分けつ期後半～出穂期前）

6月下旬以降は平年より降水量が少なく推移したため、強い中干しとなり、生育は抑えられた。このため、草丈は概ね平年並みとなり、茎数は‘はるみ’で平年に比べ少なく、‘キヌヒカリ’で平年並み、‘てんこもり’で平年並み～やや多くなった。葉色は全体的に平年に比べ薄くなった。また、中干し後の用水が十分に確保できなかった地域がごく一部で見られた。

4 出穂期

気温は6月下旬以降も平年より高く推移したため、生育はやや早まり、出穂期は平年に比べ2～3日早かった。

出穂期以降の気温は平年よりかなり高く、日照時間は長く推移したため、登熟は順調であった。

5 成熟期

成熟期は‘はるみ’、‘キヌヒカリ’で平年に比べ5～7日、‘てんこもり’で6～8日早く、特に、遅植えで大幅に早かった。登熟日数は平年に比べ3～5日短縮した。これにより収穫適期は平年に比べ大幅に早まったが、収穫時期は平年と大きく変わらず、全体的に刈り遅れの傾向であった。

稈長は概ね平年並みだったが、6月中旬植えの‘はるみ’で平年よりやや短く、‘てんこもり’でやや長くなった。穂長は平年並みであった。穂数は品種、作期によってばらつきがあり、‘はるみ’では6月上旬植えで平年より多く、6月中旬植えでやや少なく、6月中旬植えの‘てんこもり’で多いほかは、平年並みであった。

9月は大きな台風の接近もなく、秋雨前線による長雨も続かず、倒伏はほとんど見られなかった。

6 玄米品質

出穂期以降は、かなりの高温となったため、白未熟粒（背白粒、基部未熟粒等）の発生が多く、また、カメムシ類による斑点米、刈り遅れ等による胴割米、着色米が見られ、品質は著しく低下した。

7 病害虫、雑草の発生及び諸障害

病害は縞葉枯病、紋枯病の発生が見られたが、大きな被害はなかった。内穎褐変病等による籾の褐変が一部で発生した。

害虫は斑点米カメムシ類の被害が各地で見られ、スクミリンゴガイは前年よりも発生量が多く、一部地域で被害が発生した。

雑草は活着期から分けつ期に藻類が、中干し以降はヒエ類が、登熟後半にはヤナギタデ、ホソバヒメミソハギの発生が多く見られた。畦畔では、7月下旬以降、ツユクサ、イボクサの発生が目立った。ナガエツルノゲイトウの発生地域が拡大した。

8 作柄概況

(1) 成熟期の生育状況（平年対比）

品種	移植時期	稈長	穂長	穂数
はるみ	6月上旬	同等	同等	多い
	6月中旬	やや短い	同等	やや少ない
キヌヒカリ	6月上旬	同等	同等	同等
	6月中旬	同等	同等	同等
てんこもり	6月上旬	同等	同等	同等
	6月中旬	やや長い	同等	多い

(2) 収量等の状況（平年対比）

品種	移植時期	玄米重	屑米重	千粒重	一穂籾数	登熟歩合
はるみ	6月上旬	同等	少ない	やや重い	少ない	高い
	6月中旬	同等	少ない	やや重い	やや多い	高い
キヌヒカリ	6月上旬	多い	少ない	同等	同等	やや高い
	6月中旬	多い	少ない	同等	やや少ない	高い
てんこもり	6月上旬	同等	少ない	同等	同等	高い
	6月中旬	多い	やや少ない	同等	同等	高い

注：平年とは過去10年（2013～2022年）の平均。ただし、はるみは2015～2022年までの過去8年平均、てんこもりは2018～2022年までの過去5年平均である。